障碍をもつ幼児の保育(1)

―この子と出会ったとき―

津守　真
津守　房江

今回、私共は障碍をもつ幼児を中心に据えて、語り手と聞き手という形式で保育を語ることにしました。形式をととのえて話そうと思うとどこを第一章にしていいか分からなくなってしまいます。なぜかと言うと障碍が前提になって話すことになるからです。障碍をもつ子どもの場合も、保育そのものはどれも変わらないと最初から思っていたからです。私共は、障碍をもつ子どもとかかわって五十年になります。今日最初に取り上げるS君の話はつい昨日の話ですが、この中に含まれる本質的なことは、以前にも何回も出会ってきたことです。こういうところから出発すれば障碍をもつ子どものことがだんだんに話せるのではないかと思います。

歩くということ　その一

S君は見通しをもって模索した

津守　真（以下Mと略記する）

昨日、十五歳になるS君が、私共の家の造形教室（私共の子どもたちが独立して使わなくなった部屋を利用して白井多実が主宰している活動）にはじめて来ました。そのときのことから始めましょう。

S君は私の家に来ると、まず玄関から外に行きたいと身振りで示しました。車椅子で両親と一緒に来たS君は、垣根につかまって歩いて端まで行きました。最初私は戸外に行きたいのかと思いました。S君はそこを見渡すと行き止まりになっているのが分かりました。それ以上先には行かないで逆の方向の物置の隅に行き、そこも行き止まりだと分かるとすぐに玄関に戻りました。門から外に行くか、それとも玄関から家の中に入るか、S君は迷った様子を示しましたが、本人は家の中に入ることを選びました。それがはっきりしていて、S君は自覚をもって行動していることが私に分りました。家に入ってからのやりとりを見ていると、手足の動きは思うようにならないことが多いが、造形をしている他の子の中で分別をもって行動しました。それが私には強い印象でした。

津守房江（以下Fと略記する）

分別をもって行動するということをもう少し詳しく話してください。

M　S君は発作もあるし、手足の動きが唐突だから、

ちょっと手を動かしただけで周囲の物がひっくりかえったりします。けれども、本人としては自覚をもって行動しているから、その意図するところを信じて環境を作れば、どんどん自分でうまく行動するようになるに違いない。あなたは歩けるんだからどこにでも行っていいよと言ってくれる場所が、これまで愛育養護学校（以下愛育と略記する）以外になかったのでしょう。よその家に行けば、台所や寝室は入ってはいけないとか、もっと制限があるのが通常です。

今日の場合で言うと、玄関から庭へ出て探索していたとき、植えたばかりの苗を踏んでもかまわないと私は覚悟していた。ところが、S君はできるだけ踏まないように分別をもって行動していました。ちょっとは踏んだけれど（笑い）。

F　今日、あなたが心を動かされたのは、S君が自覚をもって移動し、伸び伸びとしていたことだったのでしょう。

M　子どもが何かをできるようになったとき、それが歩くことであろうと手を使うことであろうと、それを子どもは使いたいと思う。そのときに励ましてあげればそれが成長のもとになると私は考えています。

F　そのできるようになったことというのは子どもによって違うでしょう。S君の場合はそれが歩くことであって、今日は気持ちよく歩いた。歩くことによって自分が今いるところを確認することだったと思う。自分が今いるところを出発点としてそこにまた戻ることができる場所、通過点としての場所ではなくてドアを開けば次が開けて、またそこに戻ることができる。S君は空間に固執してそこから次の段階を開いていったのでしょうね。

以前のS君の様子

M　S君は、愛育を卒業して以来、自分が歩いて行こうと思うところに歩いて行かれないという環境でした。

そこを話すのにS君の前史を話しておかねばならない。S君が愛育に入学して来たのは小学校一年生のときです。私はその頃数年間あまり愛育に行くことができず、S君とあまり付き合いがありませんでした。その間の様子を聞いてみると、一年生のころはほとんど移動ができなくて、車椅子に乗せられたままだった。二年生くらいのときに急にいざり歩きをするようになって、見る見るうちに速いスピードでいざるようになり、一人で立って歩くようになった。私は、S君があれよあれよと言う間に歩けるようになったことに驚きました。愛育では子どもが行こうと思った所に、職員室であろうと応接室であろうと、学校の中ならばどこでも行ってもいいよと励ましています。そういうようにやってきて、じきにS君はつかまって歩くようになり、別人かと思うようになって私が驚いた時期があったのを思い出します。ところが愛育養護学校を六年生で卒業した後、どこの専門の訓練所でも、自分で歩いて行っていいよと言われなくてむしろ規制されたので、もうそこには行かなくなってしまった。結局中学校にも行かなくなってしまいました。

更にその前の小さいときのことですが、S君は心臓が悪くてその手術のときに事故で脳梗塞を起こしました。それが二歳前後で、それまでしゃべったり走ったりしていたのに急に歩けなくなり話せなくなり、親たちは大きなショックを受けました。

そこから今日の話になるのだけれど、これは障碍をもつ子どもの一つの典型ではないかと思う。造形教室の傍らでそんなことをS君の両親と話しました。

F　S君は発作が起きるんでしょ？

M　そう、突然発作が起きる。

F　こういう子にはひとりひとり丁寧にかかわることが大切だから、あまり早くから集団行動をするような場はすすめられないのではないかしら。

M　そう、すすめられない。特に幼児期では親も一緒

に入って遊べるような緩やかなところがあるといい。

歩くことは嬉しいこと、そして成長すること

M　どんな子どもでも、歩き始めた頃、自分で歩いてどこにでも行ける環境があるというのは成長のひとつの条件になるのではないだろうか？

私は愛育で何人もの子どもでそのことを確認しました。私がかつて担任をしていた三歳の女の子はいつも額にしわを寄せて、自閉症と言われていました。母親は東京に引っ越して来たばかりで、狭いマンションの一室で母子二人きりで、子どもが外に出たいと言っても出て行かせられないでいました。その子が初めて愛育に来たとき、どんどん歩いて職員室に行き、応接室に行き、学校中毎日歩き回ってそれ以外のことはしないくらいでした。

F　幼稚園や保育園でも、朝、まず園の中を走り回らなければ一日が始まらない子どもがいるけれど、同じことでしょうね。

M　そう、同じことです。親は、歩くことの大切さをなかなか分かってくれない。この学校は歩く以外は何もしてくれないと私は母親から言われました。私は思うところに歩いて行くことが今のこの子のすべてだと思い、何週間も一生懸命にそれをやったのに。あるとき実習生と私がピアノを弾いて子どもと一緒に踊ってとても楽しかったことがありました。その子ははじめて笑いました。その時その子の世界がパーッと開けたように見えました。それは私にとって嬉しい瞬間でした。

歩いて行こうと思うところに自分で歩いて行ける環境を作ることが成長の元だということ。私はそこが言いたいのです。

F　思うところに歩いて行けることがなぜ成長の元と考えるのでしょうか？

M　なぜかとは分からないけど。人間はそういうふうにできているのではないか。人間の成長は、第一に存

在感がしっかりしていること、第二に、能動性、第三に相互性、第四に自我が大事と私は考えています。存在感はいつも愛されているという確信から、能動性は子どもがやろうと思うことの価値が周りの人に認められる環境から生まれます。それは一見簡単に見えるが、今の時代にはなかなか難しい。子どもが自分でやろうとすることには必ず意味があるのに、結果に結び付かないことは切り捨てるので、今の時代は原因結果で考えるから、子どもが心の底で本当に願っていることを見ることができない。

F　子どもが自分の足で歩いて移動することの意味については、「人間とはそういうふうにできている」と言うだけでは説明にならないでしょう。私は、移動することによってぐるっと回ってまた戻って来る循環性が大事なのだと思います。外に行ってもまた元に戻って来るという存在感が根底にあっての能動性だと思います。愛されて受け止められるだけではなくて、移動によって自分の場所があることを自分から把握することによって存在感が更に確認できるのではないか。

M　それは循環性の問題。愛育の場合には、ひとつのドアをあけるとまた元に戻るという循環空間があった。このことは幼児期に一般に言えることだと思います。

F　子どもによっては、枠の外へ、外へと向かって行くこともありますね。それはどう考えたらいいのでしょう。

M　それはひとりひとり違うし、時期によっても違うことでしょう。また次の機会にとりあげましょう。

F　今回、話しているなかで、人が自分で出来ることの自信と、生きていく場所の把握というふたつの大きなテーマが浮かび上がってきました。